

非認知能力の育成に焦点を当てた学校教育の改善

— SELの要素を取り入れた中学校教育の改善 —

高校教育研究係
長期研修員 高橋 光伸

《研究の概要》

本研究は、これから社会を生きる子供たちが、自ら考え、行動し、他者と協力できる力を育むことを目的として、中学校教育にSEL（社会性と情動の学習）を取り入れた研究である。

具体的な取組として、学校行事である合唱発表会を題材にした体験型SELプログラムを開発し、研究協力校の全クラスで実施した。また、5教科の授業にSELの要素を取り入れ、各教科の学習内容と関連付けながら、授業の構想と実践を行うことで非認知能力（SELコンピテンシー）の育成を目指した。これらの実践の効果を検証するために、アンケート調査を行い生徒や教員の意識の変化を見取ったり、専門機関が開発したSELコンピテンシー評価アンケートを実施し、客観的なデータに基づいた分析を行ったりすることで、SELを学校教育に取り入れることの有効性を明らかにしたものである。

キーワード 【前期中等教育・中学校 SEL 非認知能力 エージェンシー 授業
学校行事】

群馬県総合教育センター
分類記号：H03-02 令和6年度 285集

I 研究背景及び方向性

群馬県では、令和5年度から取り組んでいる「非認知能力の評価・育成事業」の一環でS A H (Student Agency High school) 指定校・協力校において、「自ら考え、判断し、行動できる生徒」の育成に向けた実践研究を進めている。また、群馬県教育委員会とスコットランドの教育関係機関との間で、非認知能力育成に関する共同研究も進めている。

非認知能力 (non-cognitive skills) とは、数値化が困難な個人の内面的な能力や特性を指し、学力テストでは測定しにくい能力の総称である。近年、非認知能力の重要性が一層高まっている。その背景には、テクノロジーの進展により、情報が目まぐるしく更新される現代において、これまでと同じスキルでは、社会の急速な変化に柔軟に対応することが難しくなっていることなどがある。O E C D (経済協力開発機構) の「Education 2030」プロジェクトでも、21世紀に求められる能力として、創造性や協調性、問題解決能力といった非認知能力の育成が不可欠であると指摘されている。また、非認知能力は学業成績だけでなく、社会的成功や幸福度とも強く関連していることが明らかになっている。これらのことから、学校教育においても、知識の伝達だけではなく、主体的に学び続ける力や、他者と協力しながら問題を解決する力を育むことが求められている。

このような中、令和6年3月に策定された「群馬県教育ビジョン（第4期群馬県教育振興基本計画）」（以下、「群馬県教育ビジョン」）では、最上位目標として「自分とみんなのウェルビーイングが重なり合い、高め合う共生社会へ向けて—ひとりひとりがエージェンシーを発揮し、自ら学びをつくり、行動し続ける『自律した学習者』の育成—」を掲げ、生徒が自らの意思と選択で自らの学びをつくり、実際の行動に移せるようになるような教育を目指している。¹

「自律した学習者」を育成するためには、「失敗を恐れない心」や「対話する力」などの非認知能力が重要であるとされている。人は他者との関わりや、試行錯誤を通じて学びを深めていく。その過程で一人一人がエージェンシーを発揮し、学びを自分事として捉え、主体的に行動することで、非認知能力が育まれていく。このような取組は、すでに学校現場で取り入れられてきたが、具体的にどのようにしたら非認知能力を育むことができるかをイメージすることは難しい。そこで、具体的な実践事例を集め、共有するとともに、各実践に共通するポイントを提案することで、全県的な取組の波及につなげたいと考えた。

以上のことから、高校教育研究係では、「非認知能力の育成に焦点を当てた学校教育の改善」を研究主題とし、3名の長期研修員（高校籍2名、義務籍1名）の実践を通して研究を進めた。高校籍の長期研修員については、研究協力校がS A H指定校であり、S A Hの取組に資する研究であることを踏まえながら、授業の中で非認知能力をどのように育成できるかについて研究した。義務籍の長期研修員については、スコットランドの教育の基盤となる「社会性と情動の学習（Social and Emotional Learning）」（以下、S E L）に着目し、中学校の教育活動における導入方法について、授業と学校行事の二つの側面から研究を行った。

実践を進めるに当たって、以下の二点を研究としての共通方針とした。

1 育成したい非認知能力を明確にする

非認知能力は多岐にわたるため、実践前に育成したい非認知能力を明確にし、それを教師と生徒が共有するようにした。育成を目指した非認知能力の変化を、生徒の姿や行動、アンケートを用いて検証した。

¹ ウェルビーイングについて、文部科学省¹⁾は「身体的・精神的・社会的に良い状態にあることをいい、短期的な幸福のみならず、生きがいや人生の意義など将来にわたる持続的な幸福を含むもの」「個人のみならず、個人を取り巻く場や地域、社会が持続的に良い状態であることを含む包括的な概念」とまとめている。また、「群馬県教育ビジョン」の中で、エージェンシーは「自分と社会をより良くしようと願う意志や原動力」と整理されている。

2 認知能力とともに非認知能力を育成する

授業での実践では、教科の学びを保障することを前提として、学習過程の工夫により非認知能力を育成することを意識した。知識の定着と並行して、主体的に学び、他者と協働する機会を設けることで、認知能力と非認知能力をバランスよく育むことを目指した。

II 研究のねらい

中学校教育において、学校行事や授業にSELの要素を取り入れて実践することが、生徒の非認知能力を育成するために有効であることを明らかにする。

III 研究内容

1 基本的な考え方

(1) 文言の定義

① SELとは

本研究ではSELを以下のように捉える。

ア 子供たちが自分の気持ちや周りの人の気持ちを理解し、自分自身を大切にし、周りの人と協力して生きていくために必要な心の力を育む学習のこと。具体的には、自分の感情を理解し、表現する力、周りの人の気持ちに共感する力、自分自身を好きになり、自信をもつ力、多様性を認め、尊重する力、コミュニケーション能力、問題解決能力、協力する力などを育むことを目指す学習のこと。

イ 今まで行ってきた教育活動に上記のような要素を取り入れ、社会性と情動の学習を学校全体で意識的に行うこと。

② 本実践における非認知能力の捉え

本実践で目指す非認知能力はSELコンピテンシーとする。SELコンピテンシーとは、社会性と情動の学習を通して育成を目指す能力のことで、主に以下の五つに分けられる。

表1 SELで育成を目指す社会的能力

SELコンピテンシー	説明
自己への気付き	自分の感情に気付き、また自己の能力について現実的で根拠のある評価をする力
他者への気付き	他者の感情を理解し、他者の立場に立つことができるとともに、多様な人がいることを認め、良好な関係をもつことができる力
自己のコントロール	物事を適切に処理できるように情動をコントロールし、挫折や失敗を乗り越え、目標を達成できるように一生懸命取り組む力
対人関係	周囲の人との関係において情動を効果的に發揮し、協力的で必要ならば援助を得られるような健全で、価値のある関係を築き、維持する力
責任ある意思決定	関連するすべての要因と、いろいろな選択肢を選んだ場合に予想される結果を十分に考慮して責任をもって意思決定を行う力

引用 社会性と情動の学習（SEL-8S）の進め方（小泉令三・山田洋平、2011年）

(2) 実践の説明

① 合唱発表会で行うSELプログラムについて

ア SELプログラム作成の背景

合唱発表会は、生徒たちが集団としてまとまり、目標を達成する喜びを体験する貴重な機会である。研究協力校の教師は、この行事を通して、クラスが団結すること、生徒一人一人が輝き、リーダーシ

ップやフォローワーシップを發揮すること、そしてお互いのよさを認め合うことなどを期待している。しかし、これらの願いを実現するための具体的な指導方法や効果的な場面設定について統一した学習プログラムが存在しないため、教師から多くの相談が寄せられた。そこで、教師の共通理解を図り、その指導を支援するために、SELプログラムを開発した。

イ SELプログラムの内容

このプログラムは、五つのSELコンピテンシー（自己への気付き、他者への気付き、自己のコントロール、対人関係、責任ある意思決定）を楽しく、具体的、体験的に学べるよう構成されている「SEL-8S学習プログラム」（小泉令三・山田洋平、2011年）を合唱発表会やその練習に関連付けた内容にアレンジし、既存のカリキュラムの中で無理なく行えるよう週2～3回、計8回の活動で構成したものである。

ウ SELプログラムの特徴

このプログラムは、以下の特徴を有している。

- ・より多くの学校で手軽に取り入れられるように、朝学習の15分で行えるよう設定している。
- ・生徒が理解しやすいイラストや語呂合わせの言葉を用いたワークシート、ポスターを用意している。
- ・指導案は、生徒と教師の授業内でのやり取りが分かる会話形式で示し、シンプルに1枚でまとめている。

② SELの要素を取り入れた授業実践について

各教科の特性に応じてSELの要素を取り入れた実践を行った。その際、共通して行ったことは以下のア～ウの3点である。

ア 授業構想シートを用いた事前準備

本実践で用いた授業構想シートは以下の三つの要素で構成されている。

【主な学習活動】授業で取り組む主な活動とその目的を具体的に記述することができる。

【目指すSELコンピテンシー】授業を通して育みたいSELコンピテンシーと、目指す生徒像を明確にする。

【手立て】目指すSELコンピテンシーを育むために、どのような活動や教材を用いるかを具体的に示す。

授業構想シートを活用することで、教師は授業の目標を明確にし、生徒の成長を促すための手立てを具体的に検討することができ、授業全体の構成を把握できる。

イ SELコンピテンシーを育む場面設定

自分の願いや力を認識し、課題を設定したり、解決方法を選択したりする「自己決定の場面」、学び合い活動により、相手の感情や意図を理解できる「他者理解の場面」、目標に向かって心を合わせ努力する「協力の場面」を計画的に授業に取り入れることで、生徒は社会で生きていく上で必要な様々な能力を身に付けることができる。

ウ 授業後の振り返りを通しての非認知能力の意識化

振り返りを通して、どのSELコンピテンシーを伸ばすことができたか、一人一人が意識できるようにする。

IV 学校行事で行うSELプログラムの実践

1 概要

対象	研究協力校 中学校全校生徒304名
実践期間	令和6年9月24日～10月18日（週2～3回 計8回）
内容	15分で行うことができる合唱発表会と合唱練習に焦点を当てた内容の体験的なSELプログラムを作成し、研究協力校の全クラスで朝学習の時間に実施した。

2 実践に向けた準備

(1) 検証計画

検証の視点	検証の方法
合唱発表会に関わるSELプログラムを作成し、教師の共通理解を図り、目指す非認知能力や具体的な指導の方法を示し実施したことは、生徒のSELコンピテンシーを伸長させることに有効であったか。	行動観察 生徒の振り返り 教師へのアンケート

(2) 指導計画

SELプログラムの導入に当たり、職員会議でプログラムの意義と目的を全職員で共有した。その後、各学年主任との打合せ、学年会での検討を経て、学年の実態に応じた実施計画を立てた。実施に当たり、全職員の共通理解を基盤としつつ、各学年の実態に合わせ柔軟な運用を行ったり、各学年の担当者が指導案と授業用資料を作成し、担任が授業を行ったりするなどの負担の軽減にも配慮した。

活動は朝学習の15分で行い、表2の内容を合唱発表会の3週間ほど前から週2～3回を目安に各学年で計画を立てて実施した。学年主任・担当者・担任が連携し、生徒の実態に合わせたプログラムを実施することで、合唱発表会に向けて生徒の成長を促した。

表2 各教材の学習内容

タイトル	目的	目指すSELコンピテンシー
1 私のよさを生かして	自分やクラスの友人のよさを認め、そのよさを生かし合唱発表会に向けて個人的な目標を立てることができる。	・自己への気付き ・他者への気付き ・責任ある意思決定
2-1 正しい聞き方 2-2 聞くと聞く	話を聞いて事実を知ることと、話の内容から相手の気持ちを理解する（聞く）ことの違いを理解する。 「正しい聞き方のポイント」（姿勢、視線、態度、あいづち）と「相手の気持ちを知るヒント」（しぐさ、表情、声の大きさ、周りの様子）を押さえた聞き方ができるようになる。	・他者への気付き ・自己のコントロール ・対人関係
3 上手な伝え方	「伝え方のポイント」（タイミング、相手の気持ちに配慮した言葉遣い、伝える理由や効果の説明）を理解する。 「伝え方のポイント」に従った伝え方を実行できる。	・他者への気付き ・対人関係
4 いろんな意見	ブレーンストーミングの手順を知り、事後に行われる「クラス合唱をよくするための工夫」についての話し合いで全員の意見を踏まえた最善の集団意思の決定ができる。	・自己のコントロール ・対人関係 ・責任ある意思決定
5 私への思い	ロールレタリングを通してクラスの友人の気持ちに気付く。他者の気持ちに気付くことの大切さを知る。	・自己への気付き ・他者への気付き
6 ポジティブに考えよう	自分やクラスの目標に向けて、落ち込んだときでも悲観的にならずポジティブな考え方で学校行事を乗り切ることができる。	・自己への気付き ・他者への気付き

3 結果と考察

(1) 結果

① 行動観察

生徒たちは、SELプログラムを通して自己認識や社会性の重要性を理解した様子がうかがえた。例えば、「1私のよさを生かして」の活動では、生徒たちは自身の長所を認識し、それらを合唱練習に生かす具体的な方法を模索した。この活動を通して、生徒たちは自信をもって自分の考えを表現し、認識した長所を生かして練習に励む姿が見られた。また、「2-1正しい聞き方」の活動では、ペアワークやカードゲームを通して、相手の気持ちに共感し、相手の立場に立って考える力を養った。相手の目を見て話を聞くことの大切さを実感する様子や最後まで寄り添って話を聞くことの難しさを感じ、コミュニケーションの重要性を深く理解した様子がうかがえた。

その他、本プログラムを通して、自分のことを他者に開示する機会が増え、自己理解を深めることで、自分の強みや可能性に気付き、それらを合唱練習や日常生活で發揮する様子を観察することができた。また、円滑なコミュニケーションの方法を学んだことで、相手の立場に立って考え、気持ちを理解しようとする姿勢が育ち、学級での話合いや合唱練習をスムーズに行えるようになった。

② 生徒の振り返り

生徒の「友達に言われたよさが意外だった」「自分のよさを生かして頑張りたい」という振り返りからは自分のよさや強みを再認識できた様子がうかがえた。また、「ネガティブな思考をポジティブに変えたい」「目標に向かって頑張ったら成果が出た」という振り返りからは感情をコントロールして、目標に向けて粘り強く頑張る姿勢が見られた。「相手の立場になって考えると気持ちに気付ける」「友達の好きな部分に改めて気付けた」という言葉からは相手の立場になって考え、他者を尊重する姿勢が見られた。更にコミュニケーション能力や相手の気持ちを理解し共感する力、協力して問題解決に取り組む姿勢が高まったことを感じさせる振り返りが多く見られた。

③ 教師へのアンケート

本プログラムの実施後、教師へのアンケートを行ったところ、「子供たちの間で協力し合う雰囲気が醸成され、友だち同士の声掛けが増えた」など、学級全体の雰囲気の改善に係る声が寄せられた。また、「教材や視覚的に分かりやすいポスター・フレーズが、生徒と教師の社会性と情動の学習への意識を高める上で非常に有効であった」との評価を得た。さらに、「このプログラムを通じて、生徒自身がクラスの合唱発表を自分事として捉え、話合いの場では積極的に意見を出し合い、合唱練習にも熱心に取り組むようになった」という変化が見られた。あるクラスでは、本プログラムを活用して、自分たちの課題や今後の練習について活発な話合いを重ねた結果、合唱のレベルが向上し、生徒にとつても教師にとつても記憶に残る合唱発表会になったとの報告を受けた。

(2) 考察

合唱発表会を題材としたSELプログラムが生徒のSELコンピテンシーの伸長に有効だったかどうかについては、行動観察、生徒の振り返り、教師へのアンケート結果を総合的に見て、効果があったと考えられる。

行動観察からは生徒たちが自己認識や他者との関わりをより積極的に行う姿が観察された。「2-1正しい聞き方」や「3上手な伝え方」などのコミュニケーションスキルが生徒に浸透し、合唱練習や日常の交流でその効果を發揮していた点が評価できる。また、相手の立場に立って考える姿勢や、自分の強みを意識し、それを生かして活動に取り組む姿勢を見取ることができた。

生徒の振り返りでは、自己への気付き、他者への気付き、対人関係の三つの側面で顕著な成長が見られた。特に、周囲からのフィードバックを受けて自己認識が深まり、その結果、目標設定や行動に変化が現れた。また、ピアフィードバックを通じて生徒間での支え合いやポジティブな感情が促進されており、合唱発表に対する意欲や成果につながったと考えられる。

教師へのアンケートからは、生徒たちの協力的な態度や、コミュニケーションの質の向上を見取ることができた。学級の雰囲気が改善され、学び合い、支え合いの精神が生まれたことは、SELプログラ

ムが生徒たちの社会性を高める上で重要な役割を果たした成果である。特に、合唱練習において生徒たちが積極的に意見を出し合い、練習に熱心に取り組む姿が見られ、SELプログラムの効果が合唱発表会に向けての実際の活動にどう反映されたかを確認することができた。

また、このSELプログラムでは、体験的な学びを重視しており、プログラムでの学びをすぐに合唱練習や日常生活の中で実践することができる。特に、視覚的に分かりやすい教材やポスター・フレーズが効果的に生徒たちの学びをサポートし、SELに対する意識を高めた。さらに教師と生徒が協力して進めるプログラム内容（例えば、ピアフィードバックや協力的な合唱活動）は、学級全体の雰囲気をよくし、プログラムの効果を一層高めた。教師が意図的に生徒同士の対話や協力を促進することが、SELの目標達成に貢献したと言える。

以上のことから合唱発表に関わるSELプログラムは、生徒のSELコンピテンシーを伸長させるために非常に効果的であったと考えられる。特に、自己への気付き、他者への気付き、対人関係、責任ある意思決定の能力が向上し、合唱発表会における協力的な雰囲気や成果に結び付いたことが確認された。教師のサポートや体験的な学びが重要な要素であり、このようなプログラムは今後多くの学校で有効に活用できると言える。

V SELの要素を取り入れた授業の実践

SELコンピテンシーを育む授業（授業実践I 理科）を研修員が先行して実施した。授業実践Iの経験を生かし、夏休み期間中に他の教科の教師と授業構想を行い、それぞれの教科でSELの要素を取り入れた授業計画を立てた。9月から10月にかけて国語、社会、数学、英語、理科の5教科で、この計画に基づいた授業を実施し、授業を通じたSELコンピテンシーの育成を目指した。

1 授業実践I

(1) 概要

対象	研究協力校 中学校第2学年 94名
実施期間	令和6年7月1日～9月11日 11時間
単元名	生物の体のつくりと働き
単元の目標	(1) 生物の体のつくりと働きとの関係に着目しながら、生物と細胞、植物や動物のつくりと働きのことを理解するとともに、それらの観察、実験などに関する技能を身に付けることができる。 (2) 身近な植物や動物の体のつくりと働きについて、見通しをもって解決する方法を立案して観察、実験などを行い、その結果を分析して解釈し、生物の体のつくりと働きについての規則性や関係性を見いだして表現することができる。 (3) 生物の体のつくりと働きに関する事物・現象に進んで関わり、科学的に探究しようとする態度と、生命を尊重し、自然環境の保全に寄与する態度を養うとともに、自然を総合的に見ることができる。

SELコンピテンシーを育むために、次ページの三つの場面を設定することを意識した授業づくりを行った。

① 生徒が自分の願いや力を認識し、主体的に学習に取り組めるように課題設定や解決方法、観察の順番を生徒自身に計画させるなどの「自己決定の場面」を設定した。例えば、植物の水の通り道の授業では、従来は根、茎、葉の水の通り道を1時間ごとに指定された方法で観察する授業展開だが、観察シートを用いて、生徒に観察の順番と方法を計画させることで学習への見通しをもたらせた。（図1）

② チームワークや協調性を育むため、生徒同士がコミュニケーションを取って役割分担や相談しながら課題に取り組めるような「協力の場面」を設定した。理科の観察では、生徒同士の協力が不可欠である。今回は、観察方法を生徒に計画させ、タブレット端末を使って観察方法を調べ、資料を作成する役割と、作成された資料を基に観察・スケッチを行う役割を分担するなどの方法を示した。これにより、生徒が互いに協力し、対人関係を意識しながら学習を進めることを目指した（図2）。

③ 学び合い活動を通して、生徒同士が互いの感情や意図を理解し、尊重し合えるようにするために、学習のまとめの場面ではグループで実験結果を共有し、共通の目標に向かってお互いの考えを聞きながら議論し、まとめを行うような「他者理解の場面」を設定した。

これらのポイントを全ての授業に取り入れることで、生徒のSELコンピテンシーを高め、主体的な学習を促進することを目指した。

(2) 指導計画（植物の水の通り道3時間を記載）

時間	■ねらい □学習活動 ★ICT活用に関する事項	知	思	態	◆評価項目<方法（観点）> ○指導に生かす評価 ●評定に用いる評価
9	■色水を吸わせた植物の葉の表皮と断面及び茎と根のつくりを観察することを通して、前に学習した葉のつくりを踏まえて、根や茎にある維管束のつくりと関連付けて理解できるようにする。	○			◆蒸散を行うための気孔や孔辺細胞、植物の茎や根の横断面と縦断面に見られるつくりを観察し、葉のつくりと関連付けてまとめ、理解している。 <記述、ワークシート（知）>
10	□色水を吸わせた植物の茎と根のつくりを観察し、葉と同じように水や養分の通り道として道管や師管があることをまとめること。				◆これまでに学習してきた葉・茎・根のつくりと働きについてICTを用いて総合的に図にまとめる活動を通して、植物が生きていくために必要なつくりと働きを理解し、表現することができるようになる。
11	■これまでに学習してきた葉・茎・根のつくりと働きについてICTを用いて総合的に図にまとめる活動を通して、植物が生きていくために必要なつくりと働きを理解し、表現することができるようになる。 □単元を通して学習した植物の葉・根・茎のつくりと、光合成、呼吸、蒸散に関わる物質の移動の関係を図にまとめ、共有する（★）。	●			◆植物体と外界との物質の出入り、植物体内の物質の移動について、つくりと働きを関連付けて理解している。 <スライド・発表（知）>

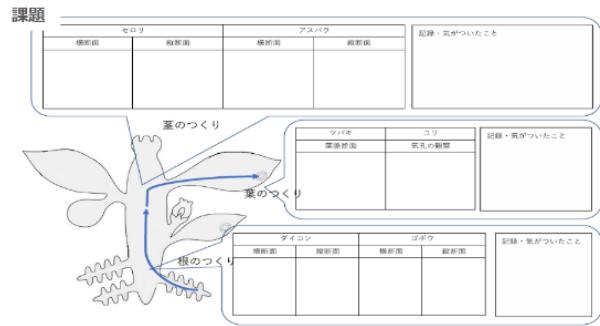


図1 観察シート



図2 観察の様子

2 授業実践Ⅱ

(1) 概要

対象	研究協力校 中学校第2学年 94名
実施期間	令和6年9月中旬～10月
題材名	国語 「盆土産」物語読み取り 社会 第3章「武家政権の展開と世界の動き」 第4章「近代国家の歩みと国際社会」 数学 4章「平行と合同」 英語 「Unit3 In Case of Emergency」 理科 消化と吸收

授業実践Ⅱでは、理科だけでなく、他の5教科でもSELコンピテンシーを育む授業を実践した。夏休み期間中に、各教科担当者と研修員とで授業構想を行い、教科の特性を生かしたSELコンピテンシーを育成する授業について議論を深めた。

授業構想に当たっては、①授業のねらいと具体的な学習内容、②授業を通して生徒に身に付けさせたいSELコンピテンシーと、育成したい生徒像、③設定したSELコンピテンシーを育むための具体的な手立ての3点を明確化するための授業構想シートを用いた。

国語の授業では、「盆土産」という物語文を題材に、3時間計画で授業を行った。2時間目の読み取り活動では、生徒一人一人が教材の中から読み取りの視点を選び、同じ考えをもつ仲間とグループを組んで議論を深め、議論の成果をスライドにまとめてクラス全体に発表した。その他の教科でも、各教科の特性を生かしたSELコンピテンシーを育む授業を実践した。（具体的な内容については、別添資料を参照）

SELコンピテンシーを育てることを意識した授業を5教科で実践するに当たり、共通して三つの過程を踏んでいる。まず、授業前に、教師が授業構想シートを用いて授業を構想することで、SELの目標を明確化した。授業中は、SELコンピテンシーの育成を意識し、各教科の特性に応じた「自己決定」「他者理解」「協力」の場面を意図的に設定した。授業後には、生徒の成長を意識化するための振り返りを行った。この過程を通して、SELコンピテンシーを育む授業を5教科において展開した。

(2) 授業構想シート（国語科を記載。他教科における授業構想シート、授業記録は別添資料を参照）

国語科 S E L 授業構想シート

※研究協力校の教科担当が作成

題材名「盆土産」

○○立○○中学校 指導者 ○○ ○○

S E L コンピテンシー（育成を目指す非認知能力）

自己への気付き【自気】 正確な自己判断、自分のよさを発揮、自信をもつ	他者への気付き【他気】 人の意見から学ぶ姿勢、多様な意見を尊重、思いやり、気遣い	自己のコントロール【自コ】 忍耐力、目標達成に向け懸命に、諦めずに取り組む	対人関係【対人】 協力、チームワーク、注意し合える	責任ある意思決定【責任】 自分で課題を見いだす、予想や仮説を立てる、問題を解決する
---------------------------------------	---	--	------------------------------	--

時間	第1時	第2時	第3時	S E L コンピテンシーを発揮する姿
ねらい・ 学習活動	盆土産の範読を聞き、確認プリントで基本的な問題を解く活動を通して、物語「盆土産」の内容を理解できるようにする。	盆土産を読みながら、今までに学習した国語の要素について、自分の興味があるものを研究する活動を行うことで学習した内容を自分の力として生かすことができるようとする。	それぞれの研究内容について、発表し、交流する活動を行うことで様々な考え方から自分の考えを深めることができるようにする。	「自己への気付き」 学んだことを基に自分の考えをタブレット端末を用いて表現している。 「他者への気付き」 まとめの場面では他者の研究内容から学び、自分の考えを広げている。 「自己のコントロール」 最後まで諦めずに研究をまとめている。 「対人関係」 グループで協力して研究を行っている。 「責任ある意思決定」 個人、若しくはグループで今まで学んだことを基に研究の手順を考えている。
S E L コンピテンシー	自気 他気 自コ 対人 責任 目標生徒の姿 諦めずに取り組み、読み直しながら、問題を解いている。	自気 他気 自コ 対人 責任 目標生徒の姿 自分で課題を見付け、周囲と協力しながら、研究している。	自気 他気 自コ 対人 責任 目標生徒の姿 自分たちの研究成果を堂々と発表し、交流し、考えを深めている。	
手立て	学習形態 教材 その他 ・簡単に内容を押さえ、繰り返し教科書を読むためのプリントを用意する。	学習形態 教材 その他 ・読み取りの視点を生徒に選択させ、同じ考え方の者同士でグループをつくり、読み込み（研究）を行えるようにする。 ・タブレット端末（スライド）を使い、研究をまとめる。	学習形態 教材 その他 ・タブレット端末を用いてそれぞれの視点で読み取り、自分の考えをまとめる。 ・タブレット端末を用いて考えを共有できるようにする。	

3 検証計画

検証の視点	検証の方法
授業に S E L の要素を取り入れ、各教科の学習内容と関連付けながら、授業の構想と実践を行ったことは生徒の S E L コンピテンシーを伸長させることに有効であったか。	生徒の振り返り 授業者へのアンケート (授業実践Ⅱのみ)

4 結果と考察

(1) 授業実践 I

① 結果

生徒の振り返りを五つの S E L コンピテンシー（「自己への気付き」「他者への気付き」「自己のコントロール」「対人関係」「責任ある意思決定」）といった観点から分析したところ以下のような成長の姿が見られた。

【自己への気付き】

課題解決型学習を通して、生徒は自分自身を見つめ直し、自らのよさを生かす機会を得た。例えば、「自分のよさがみんなの意見を聞くことによって発揮され、少しだけど意見をまとめることができた場面があった」という記述からは、正確な自己評価とともに、グループの中で自分の役割を果たす喜びを見いだしたことがうかがえる。また、「顕微鏡で見るときに植物を薄く切ることに繰り返し挑戦した」という行動は、自己の技術力を認識し、改善に努める姿勢を示している。

【他者への気付き】

グループ活動の中で、生徒は他者の意見を尊重し、学ぶ姿勢を育んだ。「グループでの意見交流の中

で、誰かの意見に新しいアイデアを付け足す場面があった」という記述は、他者の意見を吸収しつつ、自分の意見を創造的に発展させる姿勢を表している。また、「グループの意見を聞いて考えを変えることができた」という記述からは、多様な視点を大切にして、柔軟に考えを深めたことが分かる（図3）。

【自己のコントロール】

本実践の中で、生徒は忍耐力や粘り強さを發揮した。「難しい練習問題を諦めずに最後まで解くことができた」という記述からは、目標達成への強い意志が感じられる。また、「実験が失敗しても次に生かそうと思えた」という記述は、失敗を学びの機会と捉え、前向きに取り組む姿勢を示している。

【対人関係】

課題解決型学習では、コミュニケーション力や協力する姿が顕著に見られた。「実験のとき、グループのみんなで手分けして早く終わらせることができた」という記述は、効率的なチームワークが実現されたことを示している。また、「友達に教えたり、アドバイスをもらったりして最後までやり遂げられた」という記述は、他者との相互支援を通じて学びを深めた様子を反映している。

【責任ある意思決定】

生徒は、自ら課題を設定し、それを解決する力を身に付けた。「実験の方法を自分なりに考え、自信をもって発表できた」という記述は、自律的な課題解決能力の成長を示している。また、「目的や課題を理解し、自分の予想を立てられた」という記述からは、学びに主体性をもって取り組む姿勢が確認された。

② 考察

授業後の生徒の振り返りからSELコンピテンシーの高まりを目指して自分の願いや力を認識し、課題を設定したり、解決方向を選択したりする「自己決定の場面」を意図的に取り入れた効果として、自分の興味・関心、強み、弱みを深く認識するようになり、強みについては堂々と自分の考えを表現できるようになったと考えられる。学び合い活動により、相手の感情や意図を理解できる「他者理解の場面」を設定した効果としては、他の生徒の意見や感情に共感し、相手の立場に立って考える力が育まれたことが読み取れる。また、異なる意見や考え方をもつ他者との協働を通して、多様性を尊重する態度が育まれたことが読み取れる。目標に向かって心を合わせ努力する「協力の場面」を設定した効果としては、グループ活動を通じて、協力し合い、共通の目標に向かって努力する大切さを学んだり、協働で問題解決に取り組むことで、複雑な問題に対処する能力を養ったりすることができたと考える。「自己決定」「他者理解」「協力」の場面を意図的に授業に取り入れて課題解決型の授業を行った結果、生徒は自ら学び、考え、行動する主体的な学びを行うようになった。以前は目標を立てても、途中で諦めてしまうこともあったが、自分の力を発揮して周囲と協力して課題を解決できた経験を通して、目標達成までの道筋をイメージし、困難があっても粘り強く取り組めるようになった。また、他者と協力し、多様な価値観を尊重しながら、課題に対して多角的な視点で捉え、解決できる能力も高まったと考えられる。

(2) 授業実践Ⅱ

① 結果

ア 生徒の振り返り

授業実践後、生徒の振り返りから読み取った生徒の姿として「自己への気付き」「他者への気付き」「自己のコントロール」「対人関係」「責任ある意思決定」といった観点から分析したところ以下のような成長の姿が見られた。



図3 グループ内での意見交流

【自己への気付き】

理科の実験では、予想を立てる際に「自分の考えをもつことができた」「自信をもって意見を発表できた」という声が寄せられた。「理科の実験方法を考える授業で、自分の意見を自信をもって班員に発表できたことで、自分の成長を感じた」という自分の成長を自覚する記述もあった。

【他者への気付き】

グループで意見を共有する場面では、「他の人の意見を聞いて『なるほど』と思うことができた」「グループ活動を通じて、違う意見を聞けたことで、『こういう考え方もあるんだ』と発見があった」といった他者の考え方から学ぶ様子がうかがえた。

【自己のコントロール】

数学の授業では「苦手な問題が解けなかつたけど、どうやつたら解けるか考えながら諦めずに取り組むことができた」という記述のように最後まで粘り強く取り組んだ振り返りが見られた。

【対人関係】

理科や英語のグループ活動では「みんなで協力して実験を成功させた」「アドバイスをし合うことでスライドをよりよくできた」といった記述が見られた。

【責任ある意思決定】

社会や数学の授業では、自分の意見をもち、根拠に基づいて結論を導く場面が多く見られた。「社会の授業でグループで意見をまとめ、クラス全体で共有することで、自分の考えをしっかりとめた」などの振り返りの記述も見られた。

イ 授業者へのアンケート

授業実践後、教師にアンケートを行い、「自己への気付き」「他者への気付き」「自己のコントロール」「対人関係」「責任ある意思決定」といった観点から分析したところ、以下のような生徒の成長の姿が見られた。

【自己への気付き】

多くの教師が、生徒が自己の特性や得意分野に気付き、それを積極的に表現する様子を見取ることができた。例えば、あるグループでは、発表の準備段階で「自分たちの意見をどう表現すべきか」を議論し、スライドを工夫して作成していた。この過程で、各メンバーが自分の得意分野（例えば、文章作成やビジュアルデザイン）を発揮する姿が見られた。また、普段は消極的な生徒が発表時には自信をもって意見を述べる場面も確認された。社会の授業では生徒たちは自分たちの研究テーマを決定する際、教科書の内容や自身の興味を基に、全員で話し合いを重ねた。そうすることで各自が主体性をもち、完成したスライドには個性が反映されていた。

【他者への気付き】

SELの要素を取り入れた授業では、多くの生徒が他者の意見を積極的に取り入れ、自分の考えを深める姿が見られた。例えば、ワークシートを使いながら他のグループの発表内容に気付きを記録し、議論に反映させる活動が行われた。これにより、多様な視点を尊重する姿勢が育まれた。英語では交流の場面で、あるグループの生徒が他グループの意見を参考にしながら自分たちのスライドを修正する場面があった。このとき、生徒たちは「この視点も取り入れたほうが分かりやすいね」と話し合い、積極的に他者の考え方を吸収していた。

【自己のコントロール】

多くのグループで、授業の中で設定された課題を解決するために粘り強く取り組む姿が見られた。例えば、スライド作成の場面では、教科書を読み込み、情報を正確にまとめる作業を繰り返すことで、諦めずにゴールを目指す態度が育まれた。国語の授業では、ある生徒は、最初はスライドの構成に悩んでいたが、グループのメンバーと相談しながら試行錯誤を重ねていた。最終的には全員が納得するスライドを完成させ、発表では高い評価を得ていた。

【対人関係】

グループ活動では、全員が役割をもち、互いに補完し合う様子が見られた。特に、学習進度に差

がある中で、得意な生徒が苦手な生徒をサポートする場面や、意見を引き出し合う様子が顕著だった。数学や理科ではグループ内で、ある生徒が他のメンバーに「ここはこうしたほうがよいかも」とアドバイスをし、全員でその意見を基に修正を加えていた。また、普段はあまり発言しない生徒が意見を述べるよう促され、自分を表現するきっかけになった。

【責任ある意思決定】

生徒たちは自分たちで課題を設定し、それに向けた解決策を協力して見いだすプロセスを経験した。特に、単元のテーマ決定やスライド作成では、各自が役割を担いながら責任をもって取り組む姿が見られた。災害についてのテーマを探究する授業では、各グループがどの災害について研究するかを話し合い、興味をもてるテーマを決定した。研究の進め方や役割分担についても、生徒同士で話し合いながら進めていた。

② 考察

授業実践Ⅰの成果と振り返りを基に、国語、社会、数学、英語、理科の各教科でS E Lの要素を取り入れた授業を実践した。その際に各教科で行ったのが授業構想シートによる授業の目標の明確化、各教科の特性に応じた「自己決定」「他者理解」「協力」の場面設定、授業後の振り返りを通してのS E Lの学びの意識化の3点である。

ア 授業構想シートによる効果

授業構想シートによる目標設定の明確化を行ったことで、教師は生徒のS E Lコンピテンシーの育成を意識した授業の構想と実践を行うことができ、生徒は学習の目的を理解し、主体的に学習に取り組むことができたと考えられる。これは、生徒の成長を見取り、次の授業につなげる足掛かりになった。

イ 各教科の特性を生かした「自己決定」「他者理解」「協力」の場面設定を行ったことによる効果

自己決定：各教科でテーマを設定したり、実験方法を考えたりする場面では、生徒は自ら課題を見付け、解決策を模索する経験をした。この経験を通して、主体性や責任感が育まれたと考えられる。

他者理解：グループ活動やディスカッションを通して、生徒は異なる意見に触れ、相手の立場を理解する機会が増えた。これにより、共感力や多様性への理解が深まったと考えられる。

協力：グループワークや共同制作を通して、生徒は協力し合い、共通の目標に向かって取り組む経験をしたこの経験を通して、協調性やチームワークが養われたと考えられる。

ウ 授業後の振り返りを通してのS E L Lコンピテンシーの意識化による効果

自分の成長を振り返ることで、自信につながり、更に学習意欲を高める様子が見られた。また、自分の課題を発見することで次の学習に生かすことができた。教師にとっては、生徒の振り返りから自身の授業の有効性や改善点を客観的に評価することができ、より効果的なS E Lの指導へつながる改善策を検討することができた。

VI S E L - 8 アンケートの結果

合唱発表会と授業にS E Lの要素を取り入れた実践を行った後、S E Lコンピテンシーがどのように変化したかを調べるために、S E L - 8研究会という専門機関が開発したS E Lコンピテンシー評価アンケートを行った。アンケート（次ページ図4）は、生徒の日常生活における行動を尋ねる26の質問で構成されており、生徒自身が自分の行動を4段階で評価する形式である。このアンケートを、プログラム開始前（7月初旬）と終了後（10月末）の2回実施し、その結果を比較することで、プログラムの効果を検証したところ、次ページ表3のような結果が得られた。

1. 自分の得意なことと不得意なことが分かっている。	4 3 2 1
2. 友達が悲しんでいると、それに気づく。	4 3 2 1
3. ムカついても、すぐにどなったりしない。	4 3 2 1
4. 周りの人が自分を理解してくれるよう、きちんと伝えることができる。	4 3 2 1
5. 何かを自分で決めるときには、どういう結果になるかをよく考える。	4 3 2 1
6. 危険な状況や場所には、近づかないようにしている。	4 3 2 1
7. 上の学校に進んでも、うまくやっていける	4 3 2 1

図4 SELコンピテンシー評価アンケート質問内容（一部抜粋）

表3 SELコンピテンシー評価アンケート結果

評価項目	7/1実施	10/25実施	差
① 自己への気付き	48.2	54.1	+5.9
② 他者への気付き	47.0	51.6	+4.6
③ 自己のコントロール	49.0	51.9	+2.9
④ 対人関係	50.1	52.7	+2.6
⑤ 責任ある意思決定	49.3	52.7	+3.4

※値は同学年の平均点・標準偏差を基に算出した偏差値を示す

アンケートの結果をt検定（優位水準1%）によって変化の有意差を調べたところ、五つのSELコンピテンシー全てにおいて、有意な向上が見られた。

VII まとめ

1 成果

本研究のねらいは、中学校教育において、学校行事や授業にSELの要素を取り入れて実践することが、生徒のSELコンピテンシーを育成するために有効であるかを明らかにすることである。合唱発表会を題材とした体験型SELプログラムの開発・実施と各教科でのSELの要素を取り入れた授業実践を行ったところ、実施前後のSELコンピテンシー評価アンケート比較の結果、生徒の自己への気付き、他者への気付き、自己コントロール、対人関係、責任ある意思決定といった五つのSELコンピテンシーが有意に上昇した。さらに、生徒の変化として自己認識の深化、他者理解の促進、協調性の向上、主体的に学習に取り組む態度が見られるようになった。

中学校教育にSELの要素を取り入れることは、生徒の非認知能力を育成し、より豊かな学校生活を送ることにつながることが示唆された。

2 課題

学校教育を通して行うSELプログラムの実践については、生徒の実態に応じた実施時間や時期、学年といった要素に加え、指導者間の共通理解が不可欠である。共通理解が不足すると、プログラムがレクリエーション化してしまい、効果的なSELコンピテンシーの育成につながらない可能性がある。

授業実践においては、生徒の主体性を尊重しつつ、教師が適切な指導を行うことのバランスが難しい点が課題として挙げられる。生徒に活動を任せすぎることで、個人個人の達成度や活動への参加度にばらつきが生じてしまった面もあった。

これらの課題を解決するために以下のようない点が重要になると考えられる。

- ・生徒一人一人の個性やレベルに合わせた課題や支援を提供することで、全ての生徒が学びを深めることができる活動を実現できること。
- ・教師全体で非認知能力の育成について理解を深め、共通理解を図ることで学校全体の教育力を向上できること。
- ・実践を継続的に行い、その効果を検証することで、学校全体でより効果的な取組につなげることができるようにすること。

3 展望

学校行事で行うSELプログラムについては、合唱発表会を通して生徒に身に付けてほしい力や思いを教師同士で共有し、共通認識に基づいたプログラムを作成、実践した。その結果、生徒は自己評価を通してSELが日常生活にどのように生かされているかを理解し、自己の成長を実感しながらSELコンピテンシーを高めることができた。

授業実践においては教師が授業構想シートを用いて、授業の目標を明確にすることで、生徒は「何のために学ぶのか」を意識し、主体的な学習へとつなげることができた。また、授業中に「自己決定」「他者理解」「協力」の場面を意図的に設定し、図5のような授業イメージ図で生徒と共有することで、生徒はこれらの能力を意識しながら学習に取り組むことができた。具体的には、他者の考えを取り入れたり、多角的な視点から考えたりする中で様々な学び方、考え方、表現方法を経験し、深い学びへとつながったと考えられる。学び方や学ぶ姿勢に関わるSELコンピテンシーの育成と、生徒の「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業改善は同じ方向を目指すものであることが分かった。

今後は、生徒と教師が共にSELコンピテンシーの成長を実感できるよう、評価方法や振り返りの機会を工夫し、可視化された目標を共有することで学校全体で共通理解の下、一貫した指導を目指したい。



図5 授業イメージ図

<引用文献>

- (1) 文部科学省 (2023) 『教育振興基本計画』

<参考文献>

- ・OECD (2018) *The Future of Education and Skills: Education 2030*. OECD Publishing.
- ・OECD (2015) *Skills for Social Progress: The Power of Social and Emotional Skills*.
- ・群馬県教育委員会 (2024) 『群馬県教育ビジョン（第4期群馬県教育振興基本計画）』
- ・小泉令三、山田洋平 (2011) 『社会性と情動の学習（SEL - 8S）の進め方』

<担当指導主事>

鈴木 崇元 坂本 直之 新井 裕之 千本木 淳